神奈川新聞　昭和36年2月22日（水曜日）第879

昭和36年 (1961年) 神奈川新聞でのインタビュー記事

（明治34年2月18日第3種郵便物認可）（新聞定価一カ月270円・一部売り10円）

私たちの太陽 ⑪

豊富な経験と知識

童話術にかけてはピカ一

童人クラブ付属児童文化研究所長
長谷川雅秀さん

童人クラブというのは、市内のこども会指導者が集まってつくっている研究グループだが、この中心リーダーになって活躍しているのが長谷川さん（三八）だ。とくにこども相手に話す童話の話術については、こうしたこども会指導者の中でもピカ一。やせたからだのうえに色が黒いので〝ガリントおじさん〟のニック・ネームをもらい、こどもたちから親しまれている。

東京生まれで、小学校三年生のとき、自宅のちかくにあった三田少年団と三田学園こども会にはいったのが、そもそもこども会に関係した最初。そのご終戦までこのこども会と少年団にはいっていたが、十五歳のときからリーダーをつとめ、後輩たちの指導にあたっていたというから、いわばこども会生えぬきの指導者だ。

のもとので……長だった有賀康や、童話の[illegible]方では日本一といわれる岸辺東京都市保健所長で、そのご奈良県の県立図書館長になった伊東峯位らについて童話の話し方を勉強したが、二十一歳のときには、早くも日本児童文化協会の常任講師になり、各地のこども会や〝こどものつどい〟などに出演、こどもたちの話し相手になっていた。

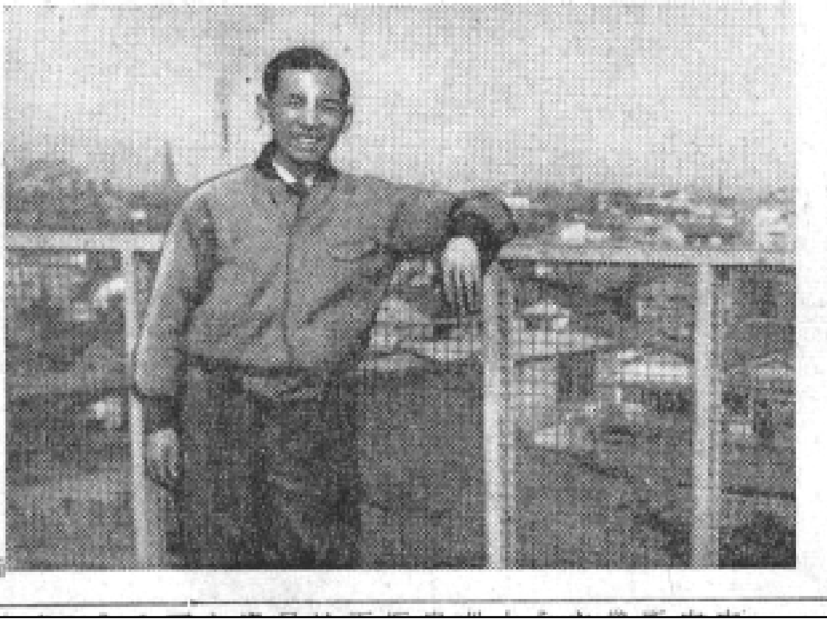
戦災で家を焼かれ、終戦直後、川崎の今井西町に住むようになったが、ここでもさっそくこども会をつくり、その指導者になった。「自分の生活がどんなに苦しいときでも、こどもたちといっしょに生活しているときがいちばん楽しい」という長谷川さんにとっては、こども会の育成というこ

とは、いわば天職のようなものなのだろう。

昭和二十六年、いまの市こども会連盟の母体になった市連合こども会の副会長になり、二十八年には童人クラブをつくってその付属児童文化研究所長となった。この児童文化研究所は、童人クラブが、直接こども会運営にたずさわっている専門指導者の研究グループであるのとちがって、もっぱら若手リーダーの養成をねらいにしたものだが、豊富な経験と知識、技術を身につけた長谷川さんの指導ぶりは、こうした若いリーダーたちにとってはアイドルのようなもので、すでに百人ちかいリーダーが、長谷川さんの教えをうけて、いま市内各地のこども会で活躍している。

昭和三十年には、こうした熱心な指導ぶりが認められ、県知事から社会教育功労者の表彰をうけたが、一昨年三月には、この〝ガリントおじさん〟に感謝する「長谷川雅秀と童話のつどい」が、川崎公民館で行なわれた。ちょうどこの年が、長谷川さんが童話口演をはじめてから二十年目。口演回数も五百回になるというので、童人クラブのメンバーや、その教え子たちが集まって開いたものだが、このときは会場いっぱいを市内のよい子たちで埋めたほか、恩師の伊東峯位さんも、はるばる奈良からかけつけて激励、長谷川さんを感激させた。

小学生のころから親交のある童話作家の花岡邦彦は、このとき激励文を寄せて「三十年の間にガリントは成長し、駄菓子屋のそれでなく、中村屋のウインドーの中のそれになった」と評したが、長谷川さんは、昭和三十一年からは、市の青少年補導連盟委員となり、いまでは全生活を青少年指導に打ちこんでおり、ようやく円熟期を迎えて、これからの活躍ぶりに大きな期待をもたれている。



いつも優しい微笑を消したことのない長谷川さん